

〈ヴェローナより愛をこめて2〉 From Verona With Love II



指揮とお話 アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, *conduct & talk*

コンサートマスター 三浦章宏

Akihiro Miura, *concertmaster*

ベッリーニ: 歌劇『カプレーティ家とモンテッキ家』序曲 (約4分)

Vincenzo Bellini: "Capuleti e Montecchi", *sinfonia* (ca. 4 min)

ザンドナーイ: 『ジュリエッタとロメオ』より舞曲 (約7分)

Riccardo Zandonai: Torch Dance and Cavalcade, from "Giulietta e Romeo" (ca. 7 min)

バッティストーニ: エラン・ヴィタル(管弦楽のための狂詩曲) (約12分)

Andrea Battistoni: élan vital (Rhapsody for orchestra) (ca. 12 min) (Japan premiere) (日本初演)

— 休憩 Intermission (約15分) —

バーンスタイン: ミュージカル『ウエスト・サイド物語』より
「シンフォニック・ダンス」 (約23分)

Leonard Bernstein: Symphonic Dances from "West Side Story" (ca. 23 min)

ベルリオーズ: 『ロメオとジュリエット』より

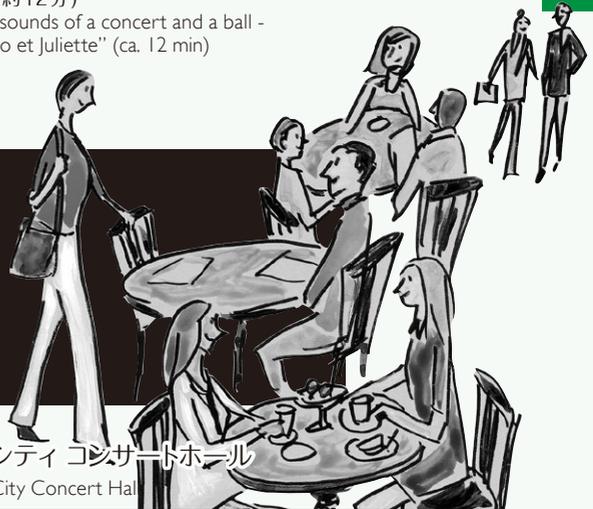
“ロメオただ一人～哀しみ～遠くから聞こえてくる音楽の集いと舞踏会のさざめき～
キャピュレット家の大宴会” (約12分)

Hector Berlioz: Romeo alone - Sadness - Distant sounds of a concert and a ball -
Great festivities in Capulet's palace, from "Roméo et Juliette" (ca. 12 min)

9/3

第73回

休日の 午後の コンサート



9/3(日) 14:00 開演 東京オペラシティ コンサートホール

Sun. September 3, 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト: ハラダチエ

プラボー! オーケストラ(NHK-FM放送)にて後日放送予定



出演者プロフィール

指揮とお話

アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

1987年ヴェローナ生まれ。アンドレア・バッティストーニは国際的に頭角を現している若き才能であり、同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年1月、ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場首席客演指揮者、2016年10月、東京フィルハーモニー交響楽団首席指揮者に就任。東京フィルとの演奏会形式オペラ『トゥーランドット』(2015年)、『イリス(あやめ)』(2016年)で音楽界を牽引するスターとしての評価を確立。そのカリスマと繊細な音楽性でセンセーションを巻き起こしている。東京フィルとは日本コロムビア株式会社より5枚のCDをリリース。



©上野隆文

これまでに、スカラ座、ヴェニス・フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレーナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン国立歌劇場等と共に、東京フィル、スカラ・フィル、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル等世界的に最も著名な楽団とも共演を重ねている。

2016年、カルロ・フェリーチェ歌劇場の委嘱による自作「エラン・ヴィタール(管弦楽のための狂詩曲)」を自らの指揮で世界初演。2017年5月には初の著書「マエストロ・バッティストーニのぼくたちのクラシック音楽」(原題「Non è musica per vecchi」の日本語版)を音楽之友社より刊行。

プログラム・ノート

解説=柴田克彦

バッティストーニが贈る「ヴェローナより愛を込めて」

今回の「休日の午後のコンサート」は、東京フィルの首席指揮者バッティストーニがおくる「ヴェローナより愛をこめて2」。6月の本公演「休日の午後のコンサート」に続いて、イタリアの古都ヴェローナ生まれのマエストロが、地元を舞台にした悲恋の物語『ロメオとジュリエット』にまつわる音楽を披露します。

6月の公演では、イギリスの劇作家シェイクスピア(1564-1616)の有名な戯曲に基づく、ベルリオーズ、チャイコフスキー、ロータ、プロコフィエフの作品が演奏されました。それらはいわば「ロメジュリ」の代表作、すなわち“基本編”でしたが、今回は、シェイクスピアとは別の原作に基づく作品、タイトルが異なる作品、翻案されたミュージカルなどが登場する“応用編”。バッティストーニの自作も交えながら進行し、前回最初に演奏されたベルリオーズ作品の別場面で締めくくるとい、アイデアに富んだ構成がなされています。

しかもバッティストーニならではの躍動するリズムや爆発的なエネルギーが効果を発揮する作品ばかり。若干視点を変えた“ヴェローナ便り”を、ダイナミックな演奏でお楽しみください。



イタリアの古都ヴェローナの野外歌劇場

©FotoEnnevi

古典文学から生まれた『ロメオとジュリエット』 あらすじ



シェイクスピア

まずは、シェイクスピアが1595年前後に書いた(とみられる)戯曲のあらすじを振り返っておきましょう。

ヴェローナの町で長年争っているモンタギュー家とキャピュレット家。モンタギュー家の一人息子ロメオは、友人たちと遊び込んだキャピュレット家のパーティーでジュリエットと出会い、二人は恋に落ちます。しかしそれは表に出せず、修道僧ロレンスのもとで密かに結婚しました。その直後、ロメオは争いに巻き込まれ、親友マーキュシオを殺された仕返しに、キャピュレット家のティボルトを殺してしまいます。そこでロメオは町から追放され、ジュリエットは親戚パリスとの結婚を命じられます。ジュリエットに助けを求められたロレンスは、死んだように見せかける毒を彼女に飲ませて皆をあざむき、ロメオと一緒にになれるよう計画。ところが計画はロメオに伝わらず、駆けつけた彼は彼女の死を悲しむあまり本物の毒を飲んで死に、目覚めたジュリエットもそれを知って後を追います。この悲劇によって、両家はついに仲直りするのです。

実はこの話、古い民間伝承やギリシャの古典に端を発し、サレルニターニ(1476)、ポルト(1530)、バンデッロ(1554)といったイタリアの作家が、細部は違えど同様の物語として発表。バンデッロ作品の仏語訳を英訳したブルックの物語詩(1562)が、シェイクスピアの種本といわれています。

ベッリーニ『カプレーティ家とモンテッキ家』

幕開けは、ドニゼッティと並ぶイタリア・ロマン派オペラの開拓者ヴィンチェンツォ・ベッリーニ(1801-1835)の歌劇『カプレーティ家とモンテッキ家』序曲です。ベッリーニは、短い生涯に『ノルマ』など10作のオペラを発表。流麗な旋律と情感に充ちた音楽は、ショパンやワーグナーにも愛されました。『カプレーティ家とモンテッキ家』は、ヴェネツィアのフェニーチェ座の依頼で書かれた全2幕のオペラ。1830年3月に初演されて大成功を収め、彼の名声を決定付けました。

ベッリーニのオペラ10作中7作で台本を担当し、理想的コンビと称されたロマーニは、初演まで2ヶ月しかなかったため、5年前ヴァッカイなる作曲家のために書いた『ジュリエッタとロメオ』を全面改訂した物語を



オペラ『ノルマ』などでも有名なベッリーニ

提供しました。この台本は、シェイクスピアの戯曲とは無関係で、ポルトの作や古い説話、あるいは1818年に出されたイタリアのシェヴォーラ作の物語に基づく内容とみられています。固有名詞はイタリア語で、登場人物は5人のみ。テバルド(ティボルト)がジュリエッタの婚約者を兼ねており、主人公2人は結婚することなく、死ぬ直前に言葉も交わします。

序曲(アレグロ・ジュスト)は、終始快速調で運ばれる軽快な音楽。ホルンで奏される流麗な旋律、中間にフルートで奏されるジュリエッタのアリア、開幕の合唱など、様々な旋律が登場しながら一気に駆け抜けます。本編の悲劇とは結び付き難いロッシェーニ風のテイストですが、もっと演奏されても良い佳品といえるでしょう。

プッチーニの後継と目されたザンドナーイ『ジュリエッタとロメオ』より

おつぎはリカルド・ザンドナーイ(1883-1944)の歌劇『ジュリエッタとロメオ』より「舞曲」です。ザンドナーイは、ヴェローナから北へ50キロの町ロヴェレートに生まれた近代イタリアの作曲家。プッチーニの後継者と目されて10のオペラを残し、代表作『フランチェスカ・ダ・リミニ』は、今も時折上演されています。



ザンドナーイ

『ジュリエッタとロメオ』は、1922年2月にローマのコスタンツィ劇場(現ローマ歌劇場)で初演された全3幕のオペラ。ロッセートによる台本は、シェイクスピア、ポルト、バンデッロの各物語をベースにしたとみられており、固有名詞はイタリア語名で、修道僧ロレンスは登場せず、主人公2人はやはり死ぬ前に言葉を交わします。

「舞曲」は、1927年にオペラの素材を用いて再構成された管弦楽作品。「松明の踊りとカヴァルカータ〜『ジュリエッタとロメオ』の交響的挿話」が正式タイトルです。ちなみにこの曲、東京フィルの5月定期演奏会でもパッティストーニが取り上げています。曲は、緊迫した導入に始まり、劇的で精緻な第2幕冒頭の“松明の踊り”から、第3幕の交響的間奏曲=“カヴァルカータ”に移ります。カヴァルカータはイタリア語で「馬に乗ること」の意味。ここでは、ジュリエッタの死を知ったロメオが、嵐の中、ヴェローナへ向かって馬を駆る様子が、激烈に描かれています。

前半最後は、パッティストーニ(1987-)の自作『エラン・ヴィタール(管弦楽のための狂詩曲)』。解説は別項をご覧ください。とて、“ヴェローナより愛をこめた”マエストロの作品がいかなるものか、実に興味深いところです。

アンドレア・バッティストーニ『エラン・ヴィタール』によせて

エラン・ヴィタールは哲学者アンリ・ベルグソンによる、現代のシンフォニック・ミュージックの音楽言語における危機を克服する可能性についての議論に触発されて生まれました。

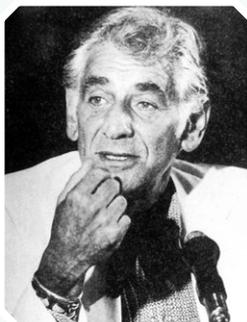
名高い指揮者であり作曲家のバーンスタインが、忘れがたいレクチャー・シリーズ「答えない質問」の中で熱心に提唱していた折衷主義のもと、作者は20世紀後半に支配的だったアヴァンギャルドと伝統主義者との間の亀裂と決別する必要がありました。「管弦楽のためのラプソディ」は、調性音楽、異なるスタイルの音楽と言語、ベルグソンの著書にある生命の起源に向けられた、創造性豊かな示唆との混成物として創作されました。冒頭、オーケストラ奏者のゆっくりとした息の音が、様々なオクターヴに分散されたD(レ)音になる。漂うような細かな音のチリの中、このD音は自然倍音を中心に展開してゆき、最終的に3度、4度、5度の和音へと形成されてゆきます。続く長いラプソディ・セッションでは、音楽の歴史を次々と旅していきます。太古の儀式のこだまが、意表をついてフォーク・ダンス、ディスコ・ミュージック、ロマンティックな爆発、ストラヴィンスキー的な複調、ポップソングとさえ混ざりながら常に速度を増してゆき、最後は心を奪うような終幕となります。

(アンドレア・バッティストーニ)



フランスの哲学者アンリ・ベルグソン(1859-1941)

バーンスタインのミュージカル『ウエスト・サイド物語』より



バーンスタイン

後半最初は、レナード・バーンスタイン(1918-1990)のミュージカル『ウエスト・サイド物語』より「シンフォニック・ダンス」です。バーンスタインは、指揮者、作曲家、ピアニストにして、教育者、テレビ解説者、著述家でもあったアメリカの超人的音楽家。生前の主たるイメージは、帝王カラヤンと人気を二分するスター指揮者でしたが、没後は創作の数々がクローズアップされています。

彼の看板曲『ウエスト・サイド物語』は、1957年に制作され、ワシントンでの初演後、ブロードウェイで破格のロングランを記録。1961年にはロバート・ワイズ監督のもと映画化され、10部門でアカデミー賞を

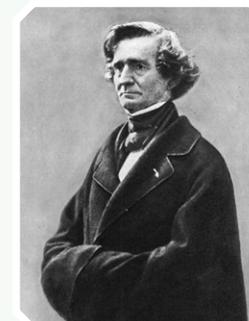
獲得しました。ジェローム・ロビンスとアーサー・ロレンツの原案による物語は、ニューヨークの貧民街を舞台にした、「ロメオとジュリエット」の翻案版。2つの不良集団＝白人系のジェット団(モンタグュー家)とプエルトリコ系のシャーク団(キャピュレット家)が対立する中、トニー(ロメオ)とマリア(ジュリエット)の愛の悲劇が展開されます。ただし原作と異なる部分も多く、トニーはマリアの婚約者チノ(パリス)に殺されますし、マリアは死なずに終わります。

「シンフォニック・ダンス」は、1961年、バーンスタインと、映画版の管弦楽アレンジャーであるシンドラミン、アーウィン・コスタルの3者によって編曲された演奏会用の管弦楽作品。いまやオーケストラの定番レパートリーにもなっています。ただし、楽曲の順番は本編と異なり、有名な歌もほとんど含まれていません。つまり、オーケストラでの演奏効果を重視して編まれたメドレー組曲で、ラテン系の打楽器や金管楽器が活躍し、リズムの妙、華麗なサウンドを満喫させてくれます。

プロローグーサムホエアスケルツォーマンボーチャチャ(マリア)ー出会いの場ークール(フーガ)ーランブルーフィナーレの9曲が続く構成。出だしは本編と同じく、フィンガースナップが印象的な部分です。静と動が交代しながら進み、掛け声でおなじみの「マンボ」や激しい「ランブル(乱闘)」でクライマックスを形成。本編同様祈るような音楽で消えていきます。

ベルリオーズの劇的交響曲『ロメオとジュリエット』

2回に亘る「ヴェローナより愛をこめて」を締めくくるのは、フランスの革新的作曲家エクトール・ベルリオーズ(1803-1869)の劇的交響曲『ロメオとジュリエット』より“ロメオただ一人～哀しみ～遠くから聞こえてくる音楽の集いと舞踏会のさざめき～キャピュレット家の大宴会”。交響曲自体は、3人の独唱と合唱を伴う大編成の管弦楽によって各場面を描いた、全4部からなるオラトリオ風の大作で、『幻想交響曲』初演の9年後の1839年に完成されました。



ベルリオーズ

6月の公演では、本作から第4部の“マブの女王のスケルツォ”が披露されましたが、今回演奏されるのは、第2部にあたる管弦楽部分。ロメオがキャピュレット家の仮面舞踏会に紛れ込み、ジュリエットと出会いながら、正体が発覚してしまう場面が、ひと続きで描かれます。

最初は、物思いにふけるロメオの様子。ヴァイオリンが出す憂鬱な旋律に始まり、憧れ

を秘めた旋律などが登場します。やがてオーボエが美しい旋律を奏で(“哀しみ”。ジュリエットを見初める部分)、ごく短い導入部分を経て、華麗なキャピュレット家の大宴会へ。複数の旋律が重ねられ、打楽器も活躍するなど、作曲者の管弦楽法の手腕が存分に発揮されます。

Follow UP!

新旧、著名にして知られざる 「ロミオとジュリエット」の音楽

6月と今月の「休日の午後のコンサート」では、「ロミオとジュリエット」(クラシック界では「ロメオ」の表記が慣例)を題材にした作品が7つ紹介されましたが、同種の音楽は他にもあります。中でも、フランス・ロマン派のグノーの歌劇『ロメオとジュリエット』は、今回登場しなかった数少ない有名作で、ジュリエットのアリア「私は夢に生きたい」は単独でもよく歌われています。このほか、プーランク、カバレフスキー、ベンダ、ブラッハー、マクファーレン、ラフといった作曲家も作品を残していますが、耳にする機会はほとんどありません。

むしろ一般に知られているのは、1996年に製作されたレオナルド・ディカプリオ主演のアメリカ映画「ロミオ+ジュリエット」の音楽(クレイグ・アームストロング作曲)かもしれません。これは以前フィギュア・スケートの羽生結弦が使用したことで注目を集めました。ちなみに彼はロータの音楽も使っていますし、他のスケーターもロータやチャイコフスキー、プロコフィエフの作品をしばしば用いるなど、「ロメジュリ」は同競技に欠かせない存在となっています。



バズ・ラーマン監督、レオナルド・ディカプリオ主演の「ロミオ+ジュリエット」(1996)

しばた・かつひこ (音楽ライター) / 音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。